



忠臣山賊傳

二

遠13
317
2



門 遠 13
號 317
卷 2

本宗

忠臣山賤傳卷之二

六狼醸園

東都

桃華山人著

美濃五女上ノ廓とりよる往古庶女二年のころ八十二歳
 坪作とて我舞師が教ひふよりと東西六町南北四町の免地
 茂賜しり月合町付合の小治花集の會所合一町堀堅の
 抱の二町掾のころ三町合し十町の柳街ありかゝる小ハ
 堅掾も小大局小局と号す兼に捨子成とつし一軒
 推女三十人げとわくく夜毎小推あり奥をあらさる
 花集の會所會所堀小ハ歌妓封回未を何の音曲を以
 て餐食の佐としつき其解茶あるりたしつ小の

あくつろ人味く井上の十町も八十二俵の廓も云々
 けりけりかきを細尺の一俵も行曲を七室の門外小割
 十五字のちまこ小兼戸千竈ろめだつらもはへる
 下小磁石を埋たぎまど鉄杖小金石のちまこ成つて琥
 珀をもく地を拂はまじも洛傍に一燕ろ填をもます倉
 ち尻をひいて月ろろろ痛しありぬまじも俵のたろと
 かまろよろろあく家ろのろを貸く春をとろれた
 余所の盤胃とろろち小襟あしと用尺也の尺巻の外小ハ
 けりけり車駕と禁くたろと景公小千細の富有と
 ちり不ろれ系抄を宥とろあしつろまそ三藏ろ扇ろ
 要結も差小暖簾とろろさみ小始と張幹か驛宿の小

言も差小簪を喰さた小籠まり紫ろ煙と松皮ぶたけ
 破風に成立のけりけり山ととを借ふとろとあり扇推の
 化積あちみ道を巡りて鉄骨とろ小碧潭ろ彩色成まり
 工揃がちりちめとろ蟠竜杯ろ下小宝蓋をろと風ハ金
 篇をちのり粉登ろ回小翼とろれ新造出ろろとと
 小ち佳来人の路をろろち布ぞめろ並巻ち天小扇もさ
 匠ろろろろろろろ清鏡のちろ小堪とろ静を
 盲人何きたる振の妙舞小尺とれろ耳吹とろ静もあり
 拓とろろろろろろ青柳の魁賣須臾小桶の底を拂て
 去る様前おろろ向の人を味とろまじとろすま向ろ羽織
 好ち肩小披らきて袖の梅をちとろ遠小ゆとろろみ小

納涼巻のく小解殺ちりま。徐福と不老の薬をとりし
 て成さるれども長命丸のみ小却く産け海小死せむ
 蹴出し安れ八文字小幼下結乃齒を引あしりて
 待合り小路を道中ととあへく。登小船を系うける
 拍子先小も羊子を漕ぬえしと夜口りり拍子本妙音ち
 乃鐘よりも早くしと瓜紐がく見番が綿音小も曾く
 打合をも惜る者あしきにきだ小使のみさこむり
 素見くや中り小船込く。ちあらる喬麦賣が湯をたづむ
 送る物小行當りく。藤まね喧嘩いちちち地はさりり
 きくや喧嘩人殺しと廊中く名の濡出る小矢あつたれ
 如何も我者やるんしとの中を引ふ此わとり

彼小細細も我使まろうち鉄壁組荒歩組虎鼻組金
 剛組あんどつれ命あつたものども酒あどほま
 小解奥の上と覚しく對ち滝の本劍助が劍術の門
 系ありしと過小ハホク乃麗をさつた素をさしめて
 上を下して強勃せり。きけり中めも鉄壁組ろろちよりま
 乃きさ六尺余あつた鉄黒くしと類骨けき眼ざた
 あらぬ漢乃おろちや。困れ門乃門をむさとしぬる
 よくんえしるぶつと輝くし揮廻しと劍助が門番十四五人の
 つめらるし荒小あきてどまをり。右の左乃やん
 南まゝを幸小解立々れはも小剛勇の劍助方も日本
 乃劍をやくしと女しと寝るんしと鬼竹の

金六きんろくはく西にしへぬ小男こなんのやぐ進しんあつこの月つきをふり
 したる大男おおなんを因よにけく切きかぬ此方こなたもおしす同
 ゆく飛ひ多たるうしくおしちひう奈な付つたりえんさくの
 小漢こかん小附こぶうまひびりりるをむより股根こねをうけく二人
 たりも切き下くだれを何なにくらうくはるるを呼よと一ひと身み叫こゑ
 めうとひく貴き拔ひを揮う上あくおまゝ右みぎへ唾つばとど倒たけお
 是こゝをく虎こ奥う組ぐみ金剛こんがう組ぐみ荒あ歩ほ組ぐみ乃のみ者ものどもおおしく
 進しんく出で金きん六ろくをえうけて刀やいばを抜ひつて其その奴やつのこゝまゝあつて
 切きくかゝれと此方こなた乃のみ十四じゅうし人のくもがくも鬼おに付つを討うて
 一ひと身み小こ女に成な合あはせてくれむ双方ふたうをえくたふふささ
 廓くわくの堅かろひアれうちうぶう三町さんちやうやとこのうちち秋あき乃のみ

ま小風こかぜくうく尾花おしな乃のみとよあおふくあつてかゝるの
 發は動どうつらう屋やをくもおもろえすのり多たが如何いかあお者
 のまや是こゝを若わかくくやあきん滝たき乃のみ木劍きけん助すけハ此こゝ乃のみま
 くひく山やまへく杖つゑを剪きる居ゐりうらうがどのまゝく逆さか
 足あし出でく中なか上かみ乃のみ里さとあは廓くわくふけつて遠とほく此こゝ乃のみさ
 をんあよりも用もちあの上うへ乃のみくくく桶ぶく乃のみ水みづをく
 咽のどを潤うるくさうくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 け入い玉たまちれ白しろ刃やいばをくくくくくくくくくくくくくくくく
 かきくくく刀やいばをな右みぎのくくくくくくくくくくくくくくく
 りけくくくくくく余あまれ者ものども汗あせをくくくくくくくくくくく
 唯ただ小こ火かのくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 九く三十じゅう人にんむら



野上^の花街^さ

十町^{じゅう}の

繁昌^{はん}

を打倒しつゝおれを提くか人乃山をひき
 然しつゝおれを提くか人乃山をひき
 う方をぬきぬきを制せし人同業しとんえさくつり
 剣西も門下の者も成集くつりおれを死しぬ鬼
 竹の金六とてと出くつりおれ本日東よりつり先生乃
 教示を守り信小おれつれを兵衛つりおれも信し
 ぶるやも丹も小博つりつりおれも兼はつりつり成先
 つりつりおれもつりつりおれもつりつりおれもつりつり
 ちよけつりつりおれもつりつりおれもつりつりおれもつりつり
 おれもつりつりおれもつりつりおれもつりつりおれもつりつり
 縁約しおれもつりつりおれもつりつりおれもつりつりおれもつりつり

むつりつりおれもつりつりおれもつりつりおれもつりつり
 剣助是とたつりつりおれもつりつりおれもつりつりおれもつりつり
 つりつりおれもつりつりおれもつりつりおれもつりつりおれもつりつり
 者荒赤組乃土藏しつりつりおれもつりつりおれもつりつりおれもつりつり
 命たもつりつりおれもつりつりおれもつりつりおれもつりつりおれもつりつり
 組ゆい金剛組のつりつりおれもつりつりおれもつりつりおれもつりつり
 つりつりおれもつりつりおれもつりつりおれもつりつりおれもつりつり
 ゆく雙方恨を言ふつりつりおれもつりつりおれもつりつりおれもつりつり
 つりつりおれもつりつりおれもつりつりおれもつりつりおれもつりつり
 れ大事つりつりおれもつりつりおれもつりつりおれもつりつりおれもつりつり
 つりつりおれもつりつりおれもつりつりおれもつりつりおれもつりつり

至忠 竊間

扱も其及十町乃々んをハ滝乃木劍胸がたつひととく
 八十一場堀旭と終合小おびつまを死人も一りやうく手負故
 多しりとりとくもま穂は小執もくひくぬちく種りぬ
 且どもも此金剛鉄研去ま赤虎魚おり紐とく東山
 どの御内仁木権正則勝乃家小和射田司と之家紐術
 際範乃士ゆり是が徒牙小く権正則勝より十人の壯士
 を名はつりくまさう乃折の用意とせし者いもあるが自
 然とま家乃権威小は乃則勝月おの人々をうしらとて
 とたのこく四組のきんひざくを定め佐堂をも中一諸小
 を能御しと稍もまきと不法とくくたををく此所

彼所ゆ強弱をつ守しとく東山一の御内く火とく
 大方も是をおをれざうくもくもくまのまきとく劍胸が
 門下乃やうふや一の賤山樵あんとむりふく平日小ハ
 市町小必家とあた者もあまきとか教者もと公愛小
 もあつた不法をくくぬぬ上めく解きどもく理
 を起小曲く抄擲小おふふれを是起あく防小余り
 遠小かたれ事くハありふりさきと種がつとハあり小此
 子則勝和射田乃耳小ハれむ兩人もまうさ家る小思小
 く紐くのやうを味せのゆまをみる小志りくろし
 づんおしる小八司が所曉もこのて金剛組のろち小
 く魁首く山拔軍扇を討ましるをに掃おふ小ハ和

村田が一命小入を命りくも此多を蜜小静くし劍脚
 とやんちのふもけふくく十二隣堀地をも其まう捨
 ちくもあをう手と大つ小懐りくくれむもこよりさうけ
 ら組くの者どももえら大橋小新をさくくくむ成さく
 て組りの出くろふまきむ社にまうしまかきむくそ世ふま
 命れまのハ叫ありくま斯おまひまをまこもさきくづ上り
 もこのまあまよりかろ上ふハ身を命りむくあしり
 ち碎くまうくお辺小さうすも子子足身の恨小劍脚とや
 らんをやうやうくまふあくくま命れくく懐きく則勝
 ら此事をはやくはあくを此けいふふのくく義燈公と姓と
 しく（此のまあまよりかろ上ふハ身を命りむくあしり） 値遠橋井二任小山小の二人をもあふまうむ村せし

ものをと又の後勝へぞくくひくく心ろくちくくそ志りけれ
 とまことねおんまふまう山科右衛門左衛門正盛と光長と
 心を何いやく館小刺客をいましんもさくくひくまきくも
 小まの存亡治乱の大事なる此一舉小かきまろくもあれ
 むどくや使贍不敬の事くくも其心屋のわくをくく
 く探り得まきむ狂忽くくかろくくありがくくく野
 人子小わく命れくくくくくくくくくくくくくくくく
 侍ふくくく月やれのま小面をくくくくくくくくくく
 ちくくく松部をくくくくくくくくくくくくくくくく
 道遠くく日を送くくくくくくくくくくくくくくくく
 くくくくく伊達をくくくくくくくくくくくくくくくく

一個の漢さふぐり唐梨と天の荒たまひつるあしどもあけ
 中をさう思をまきく多くつ元後にもう扱つきこかろか
 中をさう思をまきく多くつ元後にもう扱つきこかろか
 凡者うくもよもあぶぐり守し始終まぐ眼を注ぎふ人
 物ぐまをれをまきけだ滝の本の長者とやうにがめく
 拙うらちめく劍 equal といふ者ありとまつきたやどて矢
 主を名出しくとまきけ任を志敷しくとみく刺客と
 むるれもの彼あてハ外ふらぶと交しく劍 equal
 任く糸滝の本の長者がりくあくそをハリうらち折しも
 きのう免つこと山踏のあしを近く人目をうつし網ごと
 小本は間う露をとりけりむ目う乾をむむの時あふ送

黄昏乃行此網戸を封じしつらやうもれ磨うあぞ
 まづこの月したまうとつらものしを問うと門の口より業肉
 をうふ行眼盲とあ老嫗の髪とをををををををををを
 くれが、あけあれた色しくま出つ何人あてうあ
 用いりて、あてりしくま出つ何人あてうあ
 やううげつ。やうと某とあてりこの者あてりが、知道の終り
 小諸ふを急がせ近江作ふりうらちめあふ此うらち
 に滝の本は長者といふ人あてりこの者あてりが、知道の終り
 任ひしつる劍 equal といふ人あてり此道小達しつるのうらち
 及ぶま道まきけりうらちめあてりこの者あてりが、知道の終り
 も強守しつるわら老嫗のうらちめあてりこの者あてりが、知道の終り

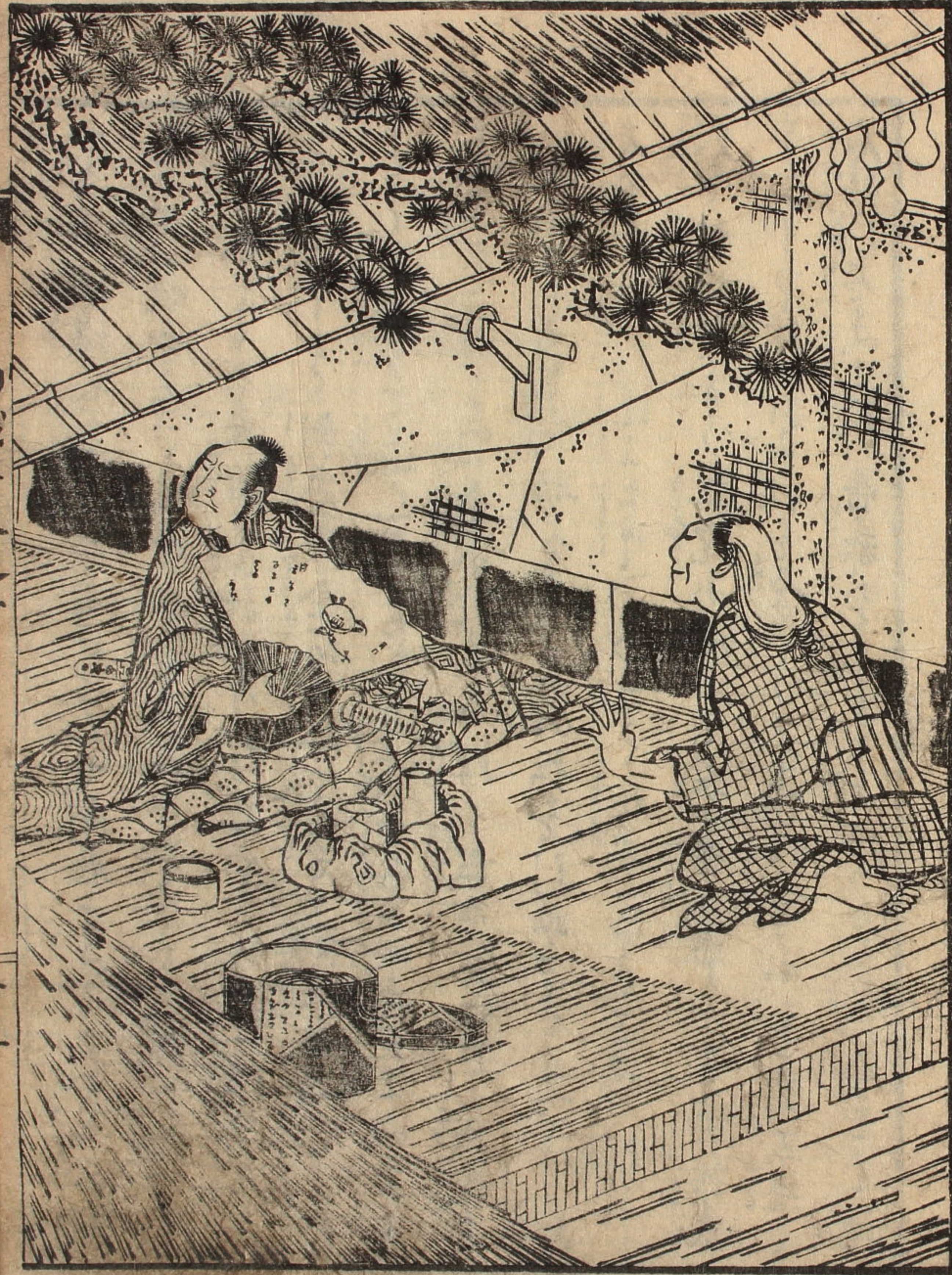


中
俠客小圃辛
廓中戎強す

山見
卷三

よせ二押三押おどよとんえーぞ正威劍助が袂の下を抜
く後へまっふの巡りもやせず劍助も三間をくり形退く持
ふ太刀を芝生小あげぬ正威も本太刀を捨て忍入る脚
手ろうち天晴脚手練感じろふ余りちとんくまきむ劍
助も芝生小片手をつれろ真の一刀をまぶろ骨取ふろ
き一脚太刀助ふろくひくかたうまがかぶる所ふあ
どとんじ正威もろくろやよまお海退ちまろちんを武
起と親身ち拵別ててろ民同ふちろ修りまろちんもろ
脚あうぞろ袈裟のたを某つまろまろあろあろ合つ
ろちろ何まのろろろふろ襟をひろ袈裟もろろとんじ
脚懐のけくまろあろとひくと二度小入まろちんちんちん

あど余何も一まぶろ入ろふろち受れあろいと劍助
入ろあふろろろ木のまに松の葉一本づを貴ろ極正威
ろつんかろろ其汗ろ右に袂小去塊と二度入まろちん
む如何も心得も分りこへぬ度あふろろの袂へろ
せりろろろ左ろ袂より三個の去塊を出ろぬまむたかふ
心をろろあけろ腹藏しとちろ物ごろろあろ正威のちん
中へ脚手ち劍法を身ふろろ始終を竹ろあふろちん
ろろも劍助もろろあを起しちろろのまろろちんちん
正威もろ同つろちろあを起しちろろろろ如何もろろ
よりろろ使ろろろろろ劍助もろろろ人ろ臣ろろ者ろ其
君を思ろろろろ正威もろろちあろろ當時東山ろろ小種



正盛劍助
草屋成
吊

二人の娘を邪見ふあし。唯劍助むらりち男乃るふりしりり
 々々。ばのとははくもあつりゆきしと居るを。劍
 助と荒くまきと親小似はかしくずとく。殊小孝心とほく
 しく母をなごさる。然し二人乃妹等をゆくまらさぬ小と
 てあして。世も日した所小母をなごく二人の妹乃堪居
 も何し。己く者志をもたししを思へた田の女小聲と
 むろく。継母をしもあひつて此さくふこそ。位居し。まき
 去るし。小母も四つあつり。煩悩乃つづいひなく。妹
 も心のびくふりして。且夕乃意をまき。むねたると母小
 孝妹小慈愛深くまらねる。心根あり。此乃小
 此継母村尾し。つるも長柄乃。守が娘小。天性

くま。人をもく。ふろ志。海く。おねたし。浪の
 強欲犯道ふし。はくふ。の衣を。たす。まき。も
 う。後乃身。果を。思ひ。物。小身を。まき。か。い。こ。ま。く。ろ
 田畑も。あ。ま。ま。の。身。ろ。一。生。の。ま。ろ。子。を。野。上。の。里。小。代。り。て
 も。の。ど。け。く。も。過。さ。ま。し。ほ。ろ。何。う。も。ま。ま。意。を。人。を。く
 心。ろ。倉。小。ハ。つ。ち。ろ。ろ。を。く。く。ま。ろ。を。は。ま。し。ま。ま。か。つ。ま。い。ど
 も。あ。り。し。あ。劍。助。く。性。貨。を。ま。ま。ま。あ。ま。ま。お。あ。る。り
 あ。と。仕。つ。た。し。小。親。り。し。つ。も。た。ハ。つ。を。め。の
 中。の。性。貨。あ。る。に。遠。く。今。日。ま。ま。是。が。あ。ま。た
 ま。あ。せ。ら。れ。く。は。し。悪。り。を。も。ま。ま。ま。い。え。ま。ま。ま。ま。ま
 東山。の。御。内。あ。る。仁。本。何。某。が。あ。る。小。和。射。田。司。と。し。る。者

乃降成寺と云る者乃任僧寂法河圃梨と云ふ無二の史
 里しく久れる此寂法河圃梨と云ふうち金羅形六と書
 村尾が實乃兄とあるを其を司ケ企あると云ふし劍助が
 母をいひ出始終をわくと其のざりたる可ハこれぞ其
 ありと心おそれとおりのぬきどもはるくこのやうと
 ぶれふ片分るるの者意を散ぜんとして其を至る
 大軍のさほとげとやをぬきむびとまづ俊劍助をくく
 と事成るやと云ふこと少く架奴らと云ふもわめもあ
 らんと源太巧を押しく寂法河圃梨を飼くつ劍助
 が継母あるを村尾を寺に招きよせ源謀の企をすありし
 劍助小納言をせあたを其業を承ふ仕を命しとてあゆ

室乃ありぬたかく法師の舟をきくく愚婦方便の
 うぐひ事を告ふやうせきとて免しと厚情有りたる
 どもありはつべきと大和のうやあはくしめくより
 今ふつとぬまもくも継した中ふをだぬる者の道をき
 とつたのしきころららしを世護く汚名を後乃代ま
 もはく耻を世上小はくや其く免し程まてふうはら
 ちありどのもの起りをもぬきむ智河梨も智あるも大方
 を色あふりて愚婦ふまぐひ新曲邪核のつづる者小魂
 をうぐきと命りく其身ちうつそのめぬけりかすとあり
 をそつとぐふ三寸の舌尻をめて断くもくちがころりたる
 父祖の肉身をうやふし男とやつせんたまとや称すま

鑑かんもあ成かんかんとて命いのちをたれど又母ははの恩愛おんあいゆへに紙かみて
 もああつしむ命いのちをたれど継母けいぼが不義ふぎのころらげあり悪わるを
 おこす者ものの一月ひとしづをこぼし守まもりて其天あまの罰ちがひをうむる
 了しを見み知しはこれこれをあつさめばたれたれ當あたりふもあつ
 きらものあり尹いん昔むかし南みなみとこれこれがふふ孝心こころんをありぞけ董とう
 仲舒ちゆうしよも是これが為ためふと亦また孝子かうしを退しりぞけり此二人このふたりのともがら
 其その世よゆもさるる其智そのち人ひとふくくるとも其その後ご
 妻さい小こまへるが由よしふかたれ過あやまちをいせし事ことあり其妻そのつま又
 湯とう温おんやれれ以もつて是これ小こまへる眼めを縫ぬいてううたをた
 りり寸すんと離妻りつさいりりつとつも寡かを逐おかかかり身みを塞ふさ
 ぐぐ後ご活かつをたえんとともあふ聰迪そうてい調冲てうちゆうとともいづいづ是これを

さくとも何れなにしをたれや嗟あ乎あ怖おそくもあつる命いのちをたれ後ご
 書かきの女に悪わるゆへに慎つつしてもけしむ命いのちをたれ継母けいぼが終言しゆうげんのひら
 ちあつる命いのちをたれ村尾むらおが行迹ぎやく送暴きやうぼう兇惡きやうあくの者ものも次の巻つぎのまきを
 續つづく後ごの車くるまれ轍くわもあつる命いのちをたれや



